

「諸生党」願入寺に集う

白井 光弘
「郷土文化」四〇号より

諸生の願入寺集会の頭取衆と動向

関東平野のなかに聳え立つ関東の名山筑波山に於て、元治元年（一八六四）三月、藤田小四郎、田丸稲之衛門等を中心に尊攘派の浪士によつて筑波義軍旗本があると、水府城下の文武諸生たちは、四月のはじめ頃より、諸生たちの間で、筑波山討伐の噂が囁かれていた。

そうした時期に水戸の抜刀指南佐藤重弘（兵介）のもとに祝町の懇意の者から門人五、六人を巡察させてほしいとの依頼があった。その頃の祝町は志士たちの格好の潜伏場所であり、「浪人がしきりに祝町に出没し乱暴を働くので、同所では遊客も少なくなり」以前の祝町のように繁栄をとり戻すため、佐藤兵介に願いがあつた。

当時の祝町について、新選組の前身をつくつた清川八郎正明が祝町の引手茶屋相模屋彦兵衛の家に宿泊した時の日

記に「相模屋が長い間志士たちの会合の場となつてきた」と記している。

佐藤兵介は、他の者が応ぜず自分一人が臣魁になるのをいやがり、今少し控えるように論じたため、門人の中に佐々木正直（萬次郎）、同姓の正久（初之介）たちが、佐藤師範を見込みがないと思ひ、十月二十九日祝町に押し出した。そして、祝町の警固に當つていた。萬次郎は佐々木正名（九郎左衛門）の次男で、初之介は、天狗騒動の際に諸生に与した人物だ。また、弘道館文武指南、石川幹二郎、内藤正直の密謀により秋山長太郎、佐藤順二郎、兵介、川村松太郎、里見常之進等を使って弘道館諸生を煽動いたし伊藤辰之介、蔭山千太郎等四、五人を先ず願入寺に出張させた。

五月二日、辰之介たちが岩船山願入寺の正受寺宅を訪れ、次のように理由を述べて集会場所の提供を申し入れた。「この度の賊徒一条により御国の乱れとなり、捨て置き難く『御家御為』を存じたてまつり（中略）中納言様へ言上及びたく発願したものの、大勢が集会できる場所を、『御連枝（親類）様同様の御山内に候』誼みをもつて、願入寺を集会場として拝借させて頂きたい。」と。これに對し、願入寺院王は、「御国のためを思う諸生たちの心意ももつともなことである」これについて討議するのであれば



大洗願入寺山門入口

喜んで提供した。いと回答があつた。

五月六日、願入寺集会の先陣を切つて十人程の文武諸生たちが水戸から祝町に入った。徒目の探索報告書

「岩船山出張諸生風聞」（上申書）によると、内蔵重久ノ長子 川上有定（捨三郎）、弟 同有友（留四郎）、西次郎忠告ノ長子 伊藤忠継（辰之介）、富田介太郎清喜ノ弟 常之介、介太郎の一子 銀五郎、佐藤兵介の弟 同易良（熊次郎）、蔭山又十郎廣覽の一子 千太郎、内藤儀左衛門の一子 成邦（彦之允）、荏谷奉仲、安松矢之允 重則ノ二子 同重成（龜吉）、弟 同重遠（謙介）、山本新平 春昌ノ一子 同三平

「右名前之者頭取にて昨二日夜岩舟會所に參會祝町辺に出張候之由」と記されている。この報告書は五月三日の夜に書かれたもので、十人余の決起に呼応して水府城下から相

当な諸生が集会したが、その陰に佐々木萬次郎たちの手引があつたようだ。願入寺集会の会合後、水府城下に戻り勢力を増した諸生らは五月七日、市川弘美等重臣および弘道館文武師範らに書を送り、『学校諸生共』の名のもと「江戸表に出府し、主君に存意を言上したいので、御同伴御尽下されたい」と願ひ出て、重臣である市川弘美（三左衛門）、朝比奈泰尚（弥太郎）、城代の鈴木重棟（石見守）、佐藤信近（図書）らの協議の上、二十六日には、水戸城南の千波原に先手物頭富田理介、使番渡辺伊右衛門等を始め都合五百余人が、白木綿に〇生を書したる肩印を付け、正四ツ時（今の午前十時）に先陣の伊藤辰之介一手が同所を出立し、江戸へ南上し、小金（松戸市）で「龍」の印に付け替えて水戸屋敷に入った。すぐさま藩邸内の尊攘派勢は一掃され、彼ら保守派重臣によつて率いられる輩は、やがて「天狗」の者に對して、「諸生」と呼ばれるようになり、山本三平、佐々木雲八郎、伊藤辰之介と云つた諸生たちが、諸生党の名のもとに天狗党討伐にあたつていた。